

第2回世田谷区総合教育会議

日：令和6年10月19日（土）

場所：世田谷区立教育総合センター

午後1時30分開会

○司会 定刻になりましたので、令和6年度第2回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の司会を務めます政策経営部長の有馬と申します。どうぞよろしくお願いたします。

開催に当たり、本日の会議の流れについて御説明いたします。本日は2部構成で行います。

第1部は、基調講演と多様な学びの実践例等の紹介になります。基調講演では、総務省地域力創造アドバイザーをはじめ、多方面で御活躍されている船木成記さんに「地域づくりの視点から、学びの意味を捉え直したい～『学習する地域』づくりについて～」、御講演いただき、その後、子どもたち一人一人の個性を引き出す多様な学びに関する事例の紹介として、学びの多様化学校分教室「ねいろ」の実践と学びの多様化学校に期待する多様な学びと、STEAM教育講座、ハローキャリアワークといった多様な学びの実践例を紹介していただきます。その後、休憩を挟みまして、区長と教育委員会による意見交換を行います。第2部は、意見交換です。第1部での基調講演、実践例の紹介を踏まえて、区長、教育委員会で議論を行います。なお、意見交換には第1部の講演者もゲストとして参加されます。

皆様には、第1部の終了後の休憩の際に御質問をお寄せいただきたいと思います。会場にお越しの方は入り口でお渡ししました質問票に、オンラインで御参加の方はZoomのQ&A機能にて質問をお寄せください。第2部の中で幾つか御紹介しながら議論いたします。

それでは、開催に先立ちまして、保坂区長より御挨拶申し上げます。区長、よろしくお願いたします。

○保坂区長 皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂展人です。

この総合教育会議なんですけれども、ちょうど2015年、平成27年からおよそ10年にわたって開催をしております。これは地方教育行政の組織及び運営に関する法律の中で、自治体の首長が教育委員の皆さんと教育長も含めて公開の場で議論をして、教育の大きな枠組みを考えていくということでございます。自治体の役割は、言わずもがななんです、教育環境の整備充実なんです。同時に、教育委員会は独立性を持っていて、学校教育の内容に責任を持って実際の教育行政の運営をしているという関係にあります、両者がク

ロスしながら共に論じるという点で2015年からの総合教育会議というのがあったことで、それぞれのテーマとして、では、学びの改革ということが言われているけれども、それはどんな改革なのか、あるいは学習指導要領が改訂されて、学力感についても主体的で対話的な深い学び、これだけ聞いているとちょっとどういう内容を指しているのか分からないねという、文部科学省の審議官を呼んで話をさせていただいて、議論に加わってもらったり、ICTの学校現場の導入についてであるとか、SDGsだとか、あるいはインクルーシブ教育、様々話題を変えながら、しかし、今の学校教育が時代に合わせて変わっていく、変えていくことということを大きく議論してまいりました。

その結果、昨年11月に世田谷区は教育大綱、これは、教育委員の皆さんと私ども区長部局、私も含めて丁々発止議論をしながらつくり上げたというもので、大変簡潔なボリュームではありますが、しっかりした内容の、次の時代をつくり上げていく教育の枠組みを提示できたかなと思っております。

同時に、教育委員会では、この教育大綱と対応する教育振興基本計画を立てていただいています、この総合教育会議もその一つの大きな出発点を昨年つくり上げたということから、前は若林小学校の取組、国士舘大学と交流をしたり、地域の様々なプレーヤーが参加する取組の紹介であるとか、あるいは国士舘大学に留学をしているアジア各国の留学生たちが、区立の小学校などに通っていらっしゃる日本語がまだ理解途上の子どもの隣について、同じ国の出身者の留学生が子どもたちのサポートをする、こんな取組をしていますよというような御紹介をいただきました。

本日は、先ほど御紹介があった船木成記さん——実はここ、教育総合センター「たいよう」という研修室も大変人気があって、本当にフル回転で使われております。上にも研修室がございます。ただ、ここは教育のセンターであるとともに、世田谷区職員の研修の場にもしました。そして、せたがや自治政策研究所というシンクタンクの本拠をこちらに置いています。建物の中に区の教育部局と違う区長部局の組織が入ることで、ぜひかき混ぜて相乗効果を生んでいただきたい、それにはどうしたらいいのかというところをアドバイザーとして船木成記さんに、昨年、大変御提言をいただきました。その大きな役割を果たしていただいたことから、引き続き、世田谷区全体の組織の硬直性や縦割り文化というのを風通しよく組み替えていくにはどうしたらいいかというようなことの観点でも御支援をいただいています。

今日は、世田谷中学校「ねいろ」を分教室として運営している前田先生をはじめ、現場

で精通されている先生方の発表を交えて、また、船木さんも含めたディスカッションを大いにしっかりと深めてまいりたいと思います。新しい教育ビジョンづくりを、形の上でしたことの中身を本日深めてまいりたいと思います。どうかよろしく願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

総合教育会議は、法律により地方公共団体の長及び教育委員会で構成されております。ここで本日の会議に参加されております世田谷区教育委員会の委員の皆様を御紹介させていただきます。

知久教育長です。

澁澤委員です。澁澤委員は、現在、NPO法人理事長を務められており、各地で講演などを行われております。また、次世代を担う青少年の育成や環境啓発活動に携わるなど様々な分野で御活躍されております。よろしく申し上げます。

中村委員でございます。中村委員は、中学校の教諭、副校長、世田谷区立中学校長を歴任し、校長会会長を務められ、東京都の教育の現場の第一線で活躍されておりました。よろしく願いいたします。

続きまして、鈴木委員でございます。鈴木委員は、世田谷区立小学校PTA連合協議会会長や東京都小学校PTA連合協議会副会長、区立小学校の学校支援コーディネーターも務められてこられました。本日はよろしく願いいたします。

また、本日は所用のため欠席されておりますが、坂倉委員についても御紹介させていただきます。坂倉委員は、これまで慶應義塾大学のグローバルセキュリティ研究所特任講師や世田谷区社会教育委員などを歴任され、現在は東京都市大学都市生活学部教授を務めるなど、教育行政の発展向上に貢献いただいております。

委員の皆様、本日はよろしく願いいたします。

それでは、第1部の基調講演に移ります。今回は、船木成記さんに「地域づくりの視点から、学びの意味を捉え直したい～『学習する地域』づくりについて～」の御講演いただきます。

それでは、どうぞよろしく願いいたします。

○船木氏 御紹介をいただきました船木でございます。改めてよろしく願いをいたします。

めちゃめちゃ緊張しています。過分な御紹介もいただいて、ちょっとどうしようかと思っておりますけれども、貴重なお時間をいただいて、このような場でお話をさせていただ

きます。よき機会をいただいて、本当に感謝を申し上げたいと思っております。

最初にちょっと言い訳みたいな話をするんですけども、今日は総合教育会議ということなんですが、私自身は教育の専門家ではないんですね。先ほど御紹介があったように、自治体の政策ですとか、事業ですとか、そういうのをいろいろ全国でお手伝いしているんですが、「学び」というキーワードを起点に地域づくりはいろいろさせていただいてきたものですから、そういうことをベースに少し感じたことをお伝えしたいと思っています。そんなことで改めてよろしく願いをいたします。

今日、私の演題といたしますか、お話としては地域づくりの視点ということで、少し言い訳済みしておりますけれども、学びというものを自分自身が考えてきた。あともう一つ、キーワードとして、「学習する地域」という言葉をずっと使ってきましたので、そちらも含めてお伝えができればなと思っています。改めてよろしく願いいたします。

今日は僕の簡単な自己紹介、それから、今日のキーワード、全体のかさにかかっている言葉が「個性」と「多様」であったかと思えます。そちらのところを少し広げたいなと思いつつながら、私の経験を少しお伝えしたいと思っています。具体的には、長野県と尼崎市というところで「学習する地域」というキーワードで経験してきたものですから、そちらをちょっとお伝えしたいと思っています。最後に、教育関係者の皆様にとってみたら当たり前のことなんですけれども、学びの作戦変更について少し感じる点、流れとしてはこのようなお話で、いただいた時間は25分というふうに言われて、ちょっと延びるかもしれないんですけども、頑張りたいと思います。

改めて私の自己紹介を簡単にお伝えします。映像にも残るといので少し出しておいたほうがいいかなと思うんですけども、博報堂という会社でソーシャルマーケティングという分野をメインでずっと仕事をしてきました。そういうような経歴をしていると、実は途中から行政の中に入るといいますか、そういう形で内閣府で男女共同参画の課長職をしたりとか、後ほどもお話をいたします尼崎市で顧問という肩書きなんですけど、非常勤だったんですけども、副市長級で処遇をいただいて、それから、同じように、その後、長野県でも参与、部長職ということでさせていただきました。行政の内部で意思決定プロセスに関わるというような経験をしてきました。案外、どこも庁議みたいところがあるんですけども、大概僕の隣が教育長でありまして、区長とか、市長とか、知事とかがいろいろぺらぺらしゃべる横で愚痴をいろいろ聞いていたという経験があるものですから、教育周りのこととかも少しお聞きはしてきたかなんていうことを思って、今日、そんなよう

なことも含めてお伝えできればなと思っています。

とは言いながらも、教育関係の経験については、学校現場に僕が出るということはしていませんけれども、インターンシップは今大分いろんなところではありますが、実はインターンシップそのもの、長期実践型のインターンシップというものが言われてそれこそ20年来あるんですけれども、その初期の頃にいろいろお手伝いをしました。地域づくりだったり、ソーシャルセクターを支援するみたいなことと、大学生が何を経験するのかということ地域に出てやる。地域の変容を学生の変容とともに地域社会の企業さんとか、そういう人たちも学ぶみたいな三者の変容みたいなものをプロデュースしたりとかしていました。

そんな中でいくと、今、世田谷区さんのことと言うとLearning for Allさん、多分不登校支援みたいなことをされていると思うんですけれども、僕はそちらのアドバイザーを一時やっていたことがあった。そんなようなことをしたりしました。

それから、先ほど申し上げた尼崎市では学びと育ち研究所みたいなことがあって、最近ですとユースワークみたいなことで尼崎市が大分注目を浴びているんですが、その基盤づくりみたいなことをちょっとさせていただいたり、あと、大学教育では、高知大学の客員教授をずっとさせていただいて、今はその肩書は外れていますが、地域協働学部であったりとか、希望創発センターをつくって、対話型の学習機会をつくっていく等々というようなことであったり、今は諏訪東京理科大学の理事をしたりもしているので、大学経営みたいなことも少し関わってきました。

あと、最近、いろいろお声をいただくのは、やっぱり今は探究学習を先生方がどうしようとか、悩みがすごくあるみたいで、自主的な勉強会が全国でいろいろありますけれども、そちらのお手伝いをしたりというようなことで微妙にかすってはきているかなと思います。そんなような経験をしている人間として、今日、ちょっとお伝えができたかなと思っています。

今日は、先ほど申し上げたように、キーワードを置いていくということなので、これを説明するというではないんですけれども、僕は尼崎市に十数年前に行って、最初に聞いた保育所の人たちの言葉だったんですけれども、後伸びする力と。面白いことを言うなと思いました。なるほどと。やっぱり先回り育児とか、何歳から英語を教えればいいんだみたいな話があって、非常に教育熱心な人たちの集団であれば先回りみたいなことがあったかもしれないんですけれども、尼崎はどちらかと言うと、いろんな意味でいろいろな町な

んですけれども、生きる力みたいなことをどういうふうに伸ばせるんだらうというようなことが1つテーマにあって、キーワードとして「後伸びする力」みたいなことがありました。ただ、これを学術的にというか、どういうふうにしたらよいか分らないけれども、町の中の持っている力としては、生きる力はたくましいよねということで、こういう言葉は大事だなと思いました。

これで僕がびんと来たのは、大人のほうに待つ勇気があるんだらうかと。今、世の中が効率化社会でありまして、成果主義といいますか、EBPMなんていうのもそうかもしれないんですが、これをやったらどうなるのというのが必ず問われるということなんですけれども、人間はトマトじゃないんだから、そんな促成栽培みたいにできないよねということで、やっぱり一人一人の成長するタイミングとか、伸びるタイミングというのがありますよねということを大人が待てるかみたいなことが多分このキーワードなんじゃないかななんていうことは当時思いました。

あともう一つ、今日は個性と多様という意味でお話をしたいんですけれども、僕はびっくりしたんですよ。この中に美術の先生がいらっしゃる、知っているよということかもしれないんですけれども、僕は美術はあまり明るくないのであれなんですけれども、尼崎に行ったら、足で絵を描いたという人がいるんですね。白髪一雄さんという方で、もう亡くなっているんですけれども、この間、生誕100年の展覧会があって、僕もそこに行ってきたんですけれども、びっくりしました。すごく立派な絵で、足で絵を描いて、画板の大きさまで言えないんですけれども、展覧会に行くとすごく大きい絵なんですけれども、実はこういう絵を描かれた人がいます。それで、当時、ハワード・シュルツというスターバックスの社長の部屋に飾ってあったりしていたんですけれども、これはオークションとかに行くと、今値段を言いにくいんですけれども、億単位で取引されているということなんです。金額がすばらしいということではなくて、やっぱり世界に通じるイノベーションみたいな——絵を描くと思うと、大概の人はペンを持つと思うんですけれども、足で描いてみようと思って実際に描いてみた人がいると。実はそういうことが尼崎の町のすぐその商店街におじちゃんがあったと。呉服屋さんの息子さんだったらいいんですけれども、実は町の中に、結果として世界に通じるけれども、自分の思いを表現したら自らの可能性が広がることすらも気づかなかったけれども、結果としてそういうふうになった人がいる。そうか、そういうものは特別なことじゃないよね、一人一人の中にあるよね。実はそういうようなことを僕はすごいなと思って、そういうことがある町は力があるなと。

でも、それは別に特別なことじゃなくて、日常の中にあるだろうと思って、その話を聞いてから小学校のアウトリーチ事業をつくりました。平成25年から今まで延べ3000人ぐらいですかね。これは準備が大変で、毎年何校か分ずつぐらいしかできないと言われちゃっているんですけども、実はこういうことです。美術の先生から言うと、これを絵として教えるというのはなかなか難しいという話なんですけど、僕はそれがポイントではなくて、今、イノベーションとか、課題解決とか、いろんなことを言っているんですけども、当たり前を疑うということがここにあるよねということ、この絵を描いて、ぐるぐる混ぜている子たちが1人でも2人でも、ああ、そういうことだと何か体感してくれるといいだろうなと思います。絵が得意な人はいると思うんですけども、足でいろんな絵をぐるぐる混ぜると最後は真っ黒になっちゃうので、あまりやり過ぎるときれいじゃないんですけども、実はそんなようなことであります。

そういうようなこともあって、多様性とか、個性とかいう話は、町の中、日常の中にあるいろいろなことを感じて、僕自身がまちづくりで一番大事にしているのは、「人は、物語を生きる動物」という言葉です。これは、イギリスの精神科医のレインさんという方が言っていて、「人は自分が何者であるかを自分に言って聞かせる、物語の主人公である」と言っています。実は、そういう意味において、多様という言葉は特別な人の多様性の話を健常者の人たちが受け入れるというだけじゃなくて、町の中にも、日常の中に実は多様性があふれているよね、物語は様々あるよねというようなことを前提としていけば、何も特別なことじゃないよね、個性とか、多様性というのは殊さら取り上げる話じゃなくて、本来我々が持ってなきゃいけない感性の中にあるはずだというようなことが多分あるのではないだろうか。そんなことを少し思ったりもしました。

それから、多様性という言葉で言うと、実は僕は先ほど申し上げた内閣府の男女共同参画局というところでジェンダーとか、最近はいろいろ難しい話もたくさんあるわけなんですけども、世田谷区でもダイバーシティ推進条例でしたか、ちょっと違うかもしれないんですが、それを一緒に伴走していた田村太郎さんという方がいらっしゃって、別のところで僕は彼から教わっているんですけども、ダイバーシティ推進にとって3つのポイントがありますと。「あつてはならない」ちがいをなくす、「なくてはない」ちがいをしっかり守る、それから、「ちがいに寛容な社会、職場」をつくろう。これは経営戦略の言葉で教わっているの、僕はこれに今日は「地域」という言葉を足したいなと思っていますけども、実はそういうことも多様性とか、個性とかいうことを受け取ったり、理解

するにはすごく大事なことなんだろうと思っています。こういう視点でまちづくり、地域づくりをしていくという形で私はいろいろ関わってきました。

「学び」というキーワードに少し寄せてお話をしますが、僕はぴんときて、すごいなと思ったのは、実はユネスコの学習権という言葉に触れ合ったときなんですね。長野県が実は公民館とか、社会教育にすごく熱心といいますか、いまだにそれがすごく残っているというのは皆さん御存じかと思うんですが、そこの流れの中で調べたり、学んだりした中で出会った言葉なんですけれども、「学習という行為は、あらゆる教育活動の中心に位置づけられ、人間行為を出来事に翻弄される客体から、自分自身の歴史を創造する主体に変えていくものである」と。人はなぜ学ぶのかというのは、実はこういうことなんだと1985年のユネスコの宣言の中にあります。なるほどと。学力とか、学ぶとかというと、偏差値とか、そんなことばかりをずっと意識してきましたけれども、いや、ちょっと待てよ、実はそうではないよね、ないしは、そういう話もあるけれども、こういうような視点をやっぱりちゃんと持つべきだろうと思いました。そんなようなこともあって、学びという言葉は深いし、意味があると僕自身はすごく感じています。

そのようなことを背景に、長野県では「学びと自治」というキーワードで総合計画を書きました。学びと自治、それから協働とか、対話とかいう言葉なんですけれども、実はこういうことがあって初めて地域の力は育まれるよねというようなことを考えたりしました。こういうことをベースにしながら様々な政策をつくるというようなことを経験したり、県庁の皆さんと一緒にやったりということをしてきました。

その中で、今申し上げたように、対話が実は大事なんですね。協働していくためには対話が必要だというふうにあるんですけれども、対話は車座集会のガス抜きとかとはちょっと違ったりもするわけなんですけれども、平田オリザさんという方が、こういうことをおっしゃっています。ディベートではなくダイアログなんだと。ディベートというのは、最初と最後で意見が変わると負けちゃうよという話ですよ。なんだけれども、ダイアログというのは、する前とした後でお互いの意見が変わるという前提でその場に立っていることなんだというふうにおっしゃっています。そうか、なるほどと。これは多様性とか、相互理解という重要なキーワードのときには、対話というのはこの意味だなというのは思いました。こういう対話ができると協働が生まれて、最終的には自治につながるなと感じて、やっぱりこういうようなスタンスを持つ日常をどうつくれるか、これは実はすごく重要なことなんじゃないかと感じました。

そうなってくると、やはり今、日本社会の中で民主主義はどうなっているんだろうと非常に気になるわけなんですけれども、オルテガ・イ・ガセットという人がこう言っています。民主主義とは、反対者と共に統治する、敵ともに生きるんだと。多数決をするのが民主主義ではないよねと。確かに、意思決定するためには多数決は必要かもしれないけれども、少数派の意見をちゃんと受け止めて、多数の側も意見を変えたり、組み合わせたり、新しい未来をつくるというのが実は重要だと、それこそが学びだよねということが多分あるんじゃないか、そういうことが地域社会の中で生まれると、希望ある地域はつくれるんじゃないかと考えました。

さらに、もう一つ、学習する地域の重要なポイントとして、経験学習という概念がござります。これはコルブさんという方が1984年に学習サイクル論という形で出しているんですけれども、人は何か具体的な経験をします。これはどういうことだったのと、振り返り、内省するとか言いますが、振り返ります。振り返ると、次はこうしてみようというふうになるわけですね。実際にこうしてみようで止まっちゃう人が案外多いんですけれども、そこから頑張って一歩踏み出して行動に移すと。そうすると、また新しい具体的な経験、このサイクルが回ることによって人は学んだという話で、これは成人学習のロジックでもあるんですけれども、なるほど、これもすごく重要だなと。個人の気づきが生まれて、それを他者と対話しながら、振り返りをしながら次のステップにつなぐ。これが実は地域自治とか、新しい未来をつくるエンジンなんだなというようなことを思って、経験学習という概念をうまく組み合わせる形で地域社会をつくれたらこれからの未来はあるんじゃないだろうか、そんなことを少し考えました。

イメージ的に言うと、先ほどの学びとかいうことで学習する個人、振り返り、経験学習を大切にしている個人がいると。でも、個人がいるだけじゃどうにもならなくて、組織、チームがないといけませんよね。チームがあって、実はそれが地域社会の中にいろいろ点をしている。ああ、なるほどと振り返って行動して次につなげるみたいなことをお互いが対話し合える、実はこういうような地域社会ができるといいなと。それを学習する地域というふうに言えたらいいなと。学習する地域という言葉は世の中にあまり流通してなくて、学習する組織という言葉は多分皆さん御存じだと思うんですけれども、それを組織という範疇からもう一つ外に広げて、地域と広げられないだろうかということを考えて、まちづくり、地域づくりというものを僕はお手伝いしたりしてきました。

尼崎では、そのことで実は学習する地域づくりを、経験学習をベースにして市民の皆さ

んと共にやりたい、ないしは進めていこうということで、みんなの尼崎大学というプログラムだったり、サマーセミナーというプログラムをさせていただいております。これは今でも並行していますし、もし関心があればネットとかに動画が出ていたりすると思うので、ぜひと思うんですけども、具体的に言うと、「まちに、まなびを、まきおこす『みんなの尼崎大学』」。ここに書いてあるように、「生涯、学習！」なんですね。生涯学習と案外言われているんですけども、この言葉は案外高齢者の方の学習っぽく捉えられちゃっているんですけども、実はそうではないんです。生涯にわたる学びというのが大事だ、生涯、学習ですよという話なんですね。

こういう意味で書かれている上に、建学の精神のところをちょこっとだけ抜き出してみると、一、日常を越えよう、一、ちがいを越えよう、一、自分を越えようと書いてあるんですけども、今日の内容にすごく合うなということで、ちがいを越えようのところだけ少し囲ってみましたけれども、「ちがいは人を分けるのではなく、豊かにするもの。ちがいがあるから知りたくなる、ちがいがあるからおもしろい。ここでいろんなちがいに会いおう」。これが地域で、町の中で人に出会うことの本当の意味だろうと思います。この違いというのはWrong、間違っているという意味ではないんですね。Differenceのほうの違いですよ。日本語ではごちゃごちゃになって同じ意味になっちゃっているんですけども、やっぱり捉え直して、多様性、他者との関係性を感じ取っていこう、実はそんなようなことがまちづくりの中で出てくると。

そうすると、こういうふうには町の中にいろいろな学びの場があるよねということになって町中がキャンパスになるよと。多分こんな話をしたら、先ほどの学び舎のプログラムだったり、国士館の若林でやったやつですかね、そういうことにつながったんじゃないかなと。そうか、なるほどとさっき聞きながら思いましたけれども、一昨年度等にお伝えをしたことがそういうふうにつながってうれしいななんていうことをちょっと思いました。

尼崎では、こんなふうにはサマーセミナーとか、みんなが先生、どこでも教室、みんなが生徒ということで、ある時間では先生をするんですけども、あるときには生徒になっているよというようなプログラムでありまして、これを夏の文化祭のようなところでやったりします。

こんなふうには大体300講座ぐらいあって大変なことになるんですけども、もしこんなことに関心があれば、動画がありますので、ネットでぜひ御覧になっていただければと思います。

こういうふうにいるんなことが起きるわけなんですけれども、長くなりました。最後になってキーワードをいろいろ並べていく中で、やっぱり学びの作戦変更が始まっているというのは当たり前のように皆さん御存じだと思うんですけれども、パウロ・フレイレが言っている銀行型の教育からの脱却、これがやっぱり重要だなと思います。今、子どもたちの学びが探究学習とか、アクティブラーニングとか、主体的で対話的で深い学びという言葉になっているわけなんですけれども、スタディー、要は強いて励むような勉強よりも、やっぱり楽しく学ぶ学習——学習の「学」も「楽」かもしれないですけれども、ラーニングのほうに変わっていくとなったときに、ここから僕が気になっているポイントは、やっぱり大人が学ばないといかんのやないかと。教育の話をしていると、大人は横にいて、学校教育の学校の中だけの話だったりになりがちだなとすごく思います。本当は学びというのは、先ほども申し上げた経験学習の観点でいくと、子どもだけじゃなくて、恐らく全ての人、毎日の中にあれは埋め込まれている話だろうと思うわけですね。その意味で、やっぱり自治的な行動も含め、地域社会をよりよくしていこうと一歩踏み出すためには、大人にこそ重要なことなんじゃないかと。今、非認知能力は大切という話はたくさんあるわけなんですけれども、大人の非認知能力のほうに危なくないかというのが僕は今すごく感じることであります。

そんなことを思って、最後の最後に本当に一言だけ申し上げると、やっぱり僕はレイチェル・カーソンの言葉が大事だなと思っています。センス・オブ・ワンダーという言葉は彼女は亡くなる寸前に書いていくわけなんですけれども、そこに書いてあるのは、生涯消えることのないセンス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見張る感性）を子どもたちには永遠に授けてほしいと彼女は言っているんですが、この言葉は実は大人に一番響かなきゃいけないことなんじゃないか。我々がこれを今失ってしまっていることが多分地域社会の閉塞感であったり、社会の閉塞感を生んでいるんじゃないだろうか。そんなことを思って、今日のキーノートスピーチといいますか、私からはキーワードをとにかく並べるということを目的にして話をさせていただきました。

流れとしてはちょっと乱暴だったかもしれないですけれども、私からは以上とさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 船木さん、ありがとうございました。今、様々なキーワードを並べていただきましたが、一番最後におっしゃっていただいた大人の学びというところが私としても感じるところがございました。地域の中で様々なつながりが生まれ、至るところで学習体験が

できるような地域づくり、世田谷づくりというのを通じて、子どもだけではなく、子どもも大人も学び合えるようなことが重要なのではないかなと感じました。ありがとうございました。

続きまして、子どもたち一人一人の個性を引き出す多様な学びに関する事例についての紹介に移りたいと思います。

1つ目は、「学びの多様化学校分教室「ねいろ」の実践と学びの多様化学校に期待する多様な学び」についてでございます。

学びの多様化学校分教室校長であり、学びの多様化学校（不登校特例校）等基本計画策定委員会委員もされている世田谷中学校の前田校長先生に御紹介いただきます。

それでは、よろしくお願いいたします。

○前田校長 世田谷中学校校長をしております前田と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速ですけれども、画面の資料の共有をお願いします。私からは、今回のテーマを基にしまして、開校3年目になりましたねいろ分教室、学びの多様化学校の分教室の取組を御紹介しながら、令和8年度開校予定の新しい多様化学校に期待することをお話ししていきたいと思います。

まず、学びの多様化学校というのはどういうものかといいますと、世田谷区独自の教育課程を編成していると。通常の学校とは異なる教育課程を編成していると。大枠でお話をしますと、通常の中学校の約90%、10%減った時数で1年間の計画を立てています。不登校の子どもたちなので朝が苦手な子もいますし、世田谷区全域から通ってきますので登校は9時と遅く、1時間目が始まるのは9時35分、通常の学校よりも1時間遅く始まっています。その分ゆとりが生まれるのですが、私は、新しい学びの多様化学校はもう少しゆとりがあってもいいんじゃないかなと。そのほうが子どもの安定的な登校につながるのではないかと考えています。

そして、一人一人のチャレンジ意欲を大切にしますということで、ねいろ分教室の魅力を一言で言うと、学校生活をもう1回やり直しましょうと。いろいろな学びの場がある中で、中学生をしっかりともう1回やってみようというのが基本的な考え方にあります。

学校ですので、教育目標があります。1つ目は学力の向上および体力の充実。やはり不登校を経験した子どもは学び残しているところがたくさんあります。様々な原因で不登校にはなりますが、不登校が続いてしまう大きな要因は学力です。勉強が分からない、そう

したことから不登校が続いてしまうので、まず基本的な学力をつけるということは極めて大事だと思っています。そして、体力の充実は、運動能力を上げるということよりも、生活体力をしっかりつけていくということに重きを置いています。

2つ目は社会性の育成。これは、孤立することなく人と関われる力、コミュニケーション力を高めることを狙っています。

3つ目は基本的な生活習慣の確立。これは、社会生活の基本的なサイクルを確立しようという目標で日々の教育活動が行われています。

多様な学びというテーマで少しお話をしますと、午前中の時間は、国語、社会、数学、理科、英語、この5教科を学年ごとにそれぞれの学年の内容を進めています。ただ、先ほども申し上げましたけれども、学び残しがありますので、それを基本としつつも、自分で過去に戻って、自分に合ったところを勉強することができます。子どもたちにねいろのいいところはと聞きますと、やはり勉強の分からないところをととても質問しやすいといった答えが返ってきます。

2つの教科で通常とは異なる勉強の取組を紹介します。これは、中学校3年生のテストの問題なんです。まず①、この問題は小学校の算数が分かっていたら解ける問題です。ところが、②は、中学校1年生の数学の中身なんです。なので、中学校1年生の学び残しがあると、この問題は解けません。これがどういうふうな仕組みになっているかといいますと、授業でどちらか、要するに、どのレベルまでやるかということを生徒が決めています。ですので、テストの問題を2つのうちから自分に合わせて選択しています。両方ができなきゃいけないわけではなくて、現状に合わせて学習内容とテストの問題を選んで取り組んでいるということが本校では行われています。

2つ目の例は、不登校の子どもがとかく苦手な体育です。通常の子どももそうですけれども、特に日常の動きにないものはとても苦手なんです。回転するとかとても苦手で、普通はこの中身を段階的に全員がやっています。でも、ねいろの子どもたちは苦手もありますし、やっぱり蓄積がなかなかないので、どこまでやるかということを自分で決めています。最後の③までやらなきゃいけないというゴールはありません。できるところまでをやろうという自己決定で勉強が進んでいます。新しい学校にやはり期待するのは、学習の中で生徒自身の自己選択と自己決定がある。そうしたことを期待したいと思っています。

そして、それらを助けるものとして、放課後の自習教室ですとか、夏休みの学習教室ですとか、あるいはキャリアカウンセリングの視点で不登校の経験がある子どもたちにその

後、来てもらって話を聞くとか、チャレンジスクールの校長先生に来てもらって、今の学びはちゃんと次に生きるんだよということを確認するような機会を設けて、学びの持続性を担保しています。

学びの多様ということと言えますと、実は、この例は多様化学校ではなくて、世田谷中学校の本校で取り組んでいる例で、面白い例だと思うので紹介いたします。2年生の社会科で、地理の勉強です。九州地方の勉強をするんですけれども、勉強のテーマは、エコランドを九州につくろうということが課題なんです。まず第一段階として、子どもたちがタブレットを使ったり、書籍などを使って自分で九州について学びます。台風が多く発生するとか、火山帯であるとか、様々な特色を学んで、その中で一人一人がパフォーマンス課題としてどんなエコランドをつくるかということをお勉強していきます。そして最後に、様々なエコランドがあるんですけれども、そうしたものを発表することで、九州地方の特徴を共有したり、深化する、そういう勉強を本校でやっています。とにかく基本的な知識がなければ、その後の創作的な活動に入れなれないと思われがちなのですが、そうではなくて、こうしたパフォーマンス課題に取り組むことで基本的な知識がついてくる。こうした形の学びをしております、これも学びの多様化学校などでは非常に有効な例ではないかなと思っています。

もう一つの特徴が午後の活動です。午後は、学年を超えて、1年生から3年生までが一つのまとまりになって勉強しています。先ほど社会性のところでお話したコミュニケーション、それから人間関係、こうしたものをしっかりつくっていくことで社会性をつけていこうという勉強です。

特徴的なものとして、探究の中でねいろタイムという時間を設けています。どういう時間かといいますと、実は開室したときに、私とねいろの先生たち職員でどんな勉強が必要かということをお話ししました。そして、テーマとして、人生をどう生きていくか。ちょっと哲学的な言い方ですけども、そうしたことについて勉強していこうということでスタートしたものです。

計画なので非常に細くなってしまうので、まず上のほうが勉強の第1ステップ、真ん中辺が第2ステップ、最後、第3ステップという3つの段階でお話をしますと、一番最初に、子どもたちは、幸せに必要なことってどんなことだろうかということをお話して挙げていきました。幸せになるためにはこんなことが必要なんじゃないか。お金、友達、勉強、愛、自分でできて幸せだと思えることが子どもたちから出てきたものです。では、ま

ず大人から話を聞いてみようといったことでゲストを招きました。子どもたちが選んだゲストは、憧れの職業代表（ユーチューバー）、お金持ち代表、不登校経験者代表、こういう人たちの話を聞いてみたいといったことでお話を聞くことができました。

そして、学習の第2段階で子どもたちは町に出ます。子どもたちがグループになって、道行く人に突撃インタビューを試みました。

そして、第3段階、招いたゲストやインタビューで学んだことをグループ発表して、全体のディスカッションをしていきました。

そして最後に、招いたゲストから子どもたちはこんな言葉をもらうんです。憧れの職業、いわゆるユーチューバーからは、「急いで自分の人生を決めることはない」、お金持ちの代表からは、「お金は幸せになる確率を上げる。でもお金がなくても幸せになれる」、最後、不登校の経験者は、「不登校を経験したことは、幸せになれる素材」。子どもたちにこんなことを言ってくれました。やはりこうした学びが子どもたちの未来には欠かせないんじゃないかなと私は思っています。

こういう学びをした子どもたちは、学びが終わってからこんな感想を言っていました。自分が今まで気がつかなかった小さな幸せに気がつくようになった、あるいは、先ほどのインタビューなんてしたことがなかったけれども、最後までやり切って自信がついた。そして、私は、これはとてもいい感想だなと思って見ました。同じ人なんていないんだ。やはり自分に対する認識が改まったかもしれません。そして、一緒に聞いた保護者は、様々な経験によって世界や視野が広がる、これが幸せなんじゃないかなと思いましたという感想を寄せてくれました。

今のお話をした学びの取組を考えたときに、それを支えるものというのは、1つは教育相談の充実です。子どもの心理的な安定なくしてよい学校生活は送れません。そこで、新しい学びの多様化学校には、ぜひカウンセリング機能を大事にしてほしいなと思っています。教員にとってもやはり心理の専門家がいるといったことは非常に心強く、間接的に教員を支えることになるかと思います。

スライドはあと3枚用意をしてあります。最後から3つ目になるんですけども、子どもたちが学校に通うとなったときにとっても重要視しているのは、自分たちの欲求を満たせる学校にするということです。子どもたちがこういうふうにしたいと言ったことを形にしていくことをねいろでは考えています。そのために大事なのは、やはり関係づくり、リレーションなんですね。なので、子ども同士の関係づくりをとっても大事にしながら、ねいろ

は運営を行っています。

そうしたものの一つの例として紹介をしますと、あと10日後に実は修学旅行に行きます。昨年度から修学旅行を三重県の答志島というところで離島体験にしました。島の人、例えば海女さんと触れ合ったり、あるいは修学旅行ではあまりない釣りに取り組んだり、ゆったりした時間を過ごすというのもこの修学旅行の一つの魅力です。そして、私がとても気に入っている写真が最後の写真なんですけれども、この写真は、朝6時に宿舎の人が日の出を見に連れていってくれました。写真を撮る前、この子たちは海をずっと見ながら日が出るのを待っていたんですね。そして、振り返って、ちょっと表情は見えませんが、本当にうれしそうな、満足そうな顔をしていました。

先ほど自己決定、自己選択と言いましたが、実はこのときに宿舎にいる子どもたちもいます。朝は苦手なので日の出は見に行かないという子どももいて、そうしたことも自己選択していいよという中で、予定していたプログラムじゃないんですけれども、こうしたこともできる修学旅行を今子どもたちには提供しています。

私は、令和5年度の卒業生が卒業式に言ってくれた言葉がねいろの一つの成果かなと思っているので、その言葉を紹介して、ねいろ分教室の紹介を終えたいと思います。

「高校に進学したら、私は勉強も部活動も友達作りも頑張ります。もしかしたら、また不登校になるかもしれませんが。しかし、私は『不登校になってもまた道は開ける』と考えています。それは、私たちには、不登校になったけれど、ねいろ分教室で元気になった経験があるからです。打たれても立ち上がる。その経験を通して、私たちは本当に強くなりました」。

以上で、ねいろ分教室の紹介を終わりたいと思います。御清聴ありがとうございました。

(拍手)

○司会 前田校長先生、ありがとうございました。改めて大きな拍手をお願いいたします。

(拍手)

それでは、2つ目、「多様な学びの実践例」でございます。前半ではSTEAM教育講座について、世田谷区教育委員会事務局の稲統括指導主事、後半ではハローキャリアワークについて、瀬田中学校副校長の高橋先生に御紹介いただきます。

それでは、よろしく願いいたします。

○稲統括指導主事 皆様、改めましてこんにちは。私は、教育委員会の教育指導課というところで統括指導主事をしております稲満美と申します。本日はよろしく願いいたしま

す。

○高橋副校長 皆さん、こんにちは。私は、現在、世田谷区立瀬田中学校で副校長をしております高橋裕也と申します。昨年度まで5年間、世田谷区教育委員会で指導主事を務めておりました。そのときの体験などをお話しできればと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

○稲統括指導主事 では、座って失礼いたします。

ここ教育総合センターでは、遊びや体験を通じて新たな世界に出会い、学びや成長につながる機会を充実させるために様々な講座を行っています。その中で、本日はSTEAM教育講座とハローキャリアワークについてお話しいたします。

初めに、私からSTEAM教育講座について御説明します。

STEAM教育とは、御存じのとおり、サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、アート、マスマティックスの頭文字を取った言葉で、各教科の知識や考え方を活用して問題解決や新しいものを創造する力、探求的な思考を育む学びです。この施設の1階にあるらぼラボという部屋で科学実験やプログラミングの講座を、大学、高校、企業、地域の方の協力の下、幼児から小中学生を対象に、年間に約90回実施をしています。今日はその講座の中から幾つか御紹介したいと思います。

これは、「メカトロウィーゴをプログラムし、迷路を攻略しよう！！」という講座です。小学1年生から3年生が対象の講座で、ロボットに踊らせたり、でんぐり返しをさせたり、動きをプログラムして楽しむ体験を通してプログラミングに興味を持ってもらい、講座の後は自分たちでさらにプログラミングについて学んでいけるようなきっかけを与えるのが狙いです。初めてプログラミングをする児童もおり、楽しかった、またやってみたいという声が上がっていました。

次は、「昆虫を顕微鏡で見よう！」という講座です。顕微鏡に触れる機会がほとんどなかった小学校低学年の子どもたちが昆虫を顕微鏡で観察することで、今まで気づかなかったことや特徴が分かり、子どもたちの昆虫に対する興味がより広がった講座でした。また、この講座は、区内にある東京農業大学の先生や学生に御協力いただいています。

こちらは、東京学芸大学附属高校のスーパーサイエンス教室です。学芸大附属高校の生徒たちが講師となり、参加した小学生が実験や工作を体験する人気の講座です。年の近い高校生のお兄さんやお姉さんと一緒に実験をすることで実験を楽しんでもらい、理科実験への興味を広げるのが狙いです。講師となる高校生にとっても、どうすれば児童にうまく

伝えられるかということを含め、自分の考えをアウトプットできる場となっています。

次は、「みんなで作るイライラ棒脱出ゲーム」という講座です。児童が電気が流れると思うものを各自持参して、実験でそれを使用することで電気の仕組みや特性などを学びました。その後、導線に触れると音が鳴るイライラ棒ゲームを作り、発表しました。この講座は、STEAM教育講座指導員という地域の方が講師となって実施しています。教育総合センターでは、教員の経験のある方や技術者などの地域人材を発掘して、子どもたちにSTEAM教育を教える指導員の育成講座を行っております。現在、地域の指導員は20名程度おり、講座のメイン講師やアシスタントとして活躍しています。

最後に紹介する講座は、「ゲームクリエイターになろう！」です。こちらは少し難易度が高く、小学5年生から中学校3年生を対象として、2日間連続で講座を行います。ゲームクリエイターになって顧客にヒアリングをし、満足してもらえるゲームを考えます。プログラミング技術の習得だけでなく、自分にとってではなく、お客さんにとってどんなゲームが求められているかヒアリングした情報を頭の中で各自整理し、自分なりに考えてプログラミングをするということで横断的に力を発揮できる内容になっています。

これまで紹介したSTEAM教育講座を、今年度より学校への出前講座としても実施しています。授業の時間で実施ができるよう、内容を各学年の教科の目標に合わせてアレンジし、小学校1、2年生「生活科」の葉っぱ化石割り出しなど、小学校28、中学校9のメニューから学校が選択できるようにしています。こちらは、来年度以降も順番に学校で実施をしていく予定です。

最後に、科学に関する教育総合センターの取組の紹介です。トライアル探究コースは、元理科の先生による伴走型の自由研究のサポートで、テーマの設定から研究、発表まで全7回の講座と夏休み期間中の個別相談にも対応しています。区立の小学校4年生から中学校3年生の児童生徒は誰でも申込みができます。

右の写真のガリレオコンテストは、中学生向けの科学コンテストで、夏休みの自由研究などを応募できます。11月の審査で選ばれた生徒が1月のコンテストに参加します。こちらは私もコンテスト当日参加をしましたが、どの発表も日常の疑問を出発点に研究が行われており、プレゼンテーションの方法を含めてオリジナリティーにあふれていました。らぼラボにポスターが貼ってありますので、機会があれば御覧になっていただければと思います。

このように、教育総合センターでは、いろいろな講座や遊びを通じて、自然や科学技術、

ものづくりでの不思議な体験などができる機会をたくさんつくっています。こうしたリアルな体験がいずれ教科書や本で学ぶ内容とつながり、より深い興味や関心につながるきっかけになることを目指しています。

では、ここからは高橋副校長にバトンタッチしたいと思います。

○高橋副校長 それでは続きまして、ハローキャリアワークについて御説明いたします。

ハローキャリアワークとは、世田谷区教育委員会と企業などの連携による仕事をテーマにした小中学生対象の講座です。各企業などの活動を知ったり、職場を体験したりする内容を基本として、企業などの課題解決のために参加者がアイデアを生かして提案するプログラムもあります。ハローキャリアワークは、子どもたちが興味のある業種やテーマを選んで参加していただき、それぞれの学びにつなげ、自らのキャリアや未来を描く機会となることを目指しています。本日は3つの講座を御紹介いたします。

1つ目は、松陰会館に御協力いただきました活動です。活動のテーマは、空き地の価値創造です。松陰会館は、リフォームなどを行う会社です。社長は、会社で所有する空き地を有効活用したいと考えていました。そこで、教育委員会と協力して、ハローキャリアワークによって解決しようと取り組みました。社長は、集まった子どもたちに次のように語りかけました。「皆さんは、今から2時間、うちの会社の社員です」。この言葉で子どもたちは魔法にかかったように真剣に取り組み始めました。

子どもたち、自分たちから実際に空き地を見たいと言って現地調査を始め、会社に戻ってアイデアを整理しました。このときに集まった子どもたちは初めて顔を合わせたんですが、課題を解決するために一生懸命チームワークを発揮して力を合わせていました。

課題を解決するための方法を私たち大人から示すことはしませんでした。子どもたちは学校で学んだ課題解決の方法を発揮しておりました。

また、まとめ方も決めていなかったのですが、学校で使っている学習用タブレット端末を主体的に活用し、考えをまとめたり、共有したりしていました。

最後は、自分たちの考えを立派にプレゼンすることができました。私は、学校の学習は社会の課題解決に役立てることができているなど改めて感じました。

次に、新たに食フェスというイベントを開催したいので協力してほしいという依頼についてのハローキャリアワークのことをお話しいたします。東京山手調理師専門学校というところから、新たなイベントで共に出店してほしいという依頼でした。当日200個販売することを想定し、事前に作って冷凍できるオリジナルの中華まんを考え、そして販売すると

いうことで依頼を受けました。「みんなの力で初めてのイベントを盛り上げてください」と、この言葉で子どもたちが意欲を高めたことを覚えております。

このハローキャリアワークでは、20人が4つのグループに分かれて、それぞれのグループがオリジナルの中華まんを創作しました。創作活動と宣伝活動、そして前日に大量に制作し、イベント当日販売するというので4日間に分かれて行いました。

子どもたちは、プロが使う調理器具や調理施設を体験できたことも魅力として感じていました。各グループには専門学校の先生がついてくださり、調理師という仕事について紹介していただきました。

創作したオリジナルの中華まんですが、イタリアンとか、スイーツ中華まんなど、様々な個性的な中華まんを考えました。この真ん中の中華まんは猫の形をしているなんていうことで、子どもたちのアイデアが生かされているんじゃないかなと思っています。どのグループのアイデアもすばらしく、本来ですと1つを選んで商品化しようと考えていたんですが、専門学校のほうも子どもたちの努力に応えようと、全てをレシピ化して、全ての中華まんを販売するということになりました。

自分たちが考えた中華まんをより売るためにどうしようかと投げかけると、自分たちで販売ポスターを書いて宣伝したいという子どもたちの思いとなり、子どもたちは自主的に作りました。最終的には子どもたちの努力が実って、中華まんは15分で200個完売してしまいました。

3つ目として、日帰りバス旅行企画の依頼についてお話しいたします。実は、この御依頼をくださった企業は、前年にバスでの親子日帰り旅行を企画しました。しかし、そのときはニーズが読めず、応募者が定員に満たなかったそうです。そこで、子どもたちの力を借りて、より魅力的なバス企画を考えることにしました。企業の方は、「ぜひ皆さんの力を貸してほしい」と伝えることで、子どもたちの心に火がとまりました。

親子220人のバス旅行ですので大変な予算がかかりますから、企業としても真剣でした。このハローキャリアワークは、打合せなど全部で3回行いました。

企業のオフィスを借りて行ったり、こちらの教育総合センターの2階などでも行ったんですが、子どもたちは仕事の現場を体験するというのをまた魅力として感じていたようです。写真を御覧いただきますと、子どもたちが企画会議を真剣に行っている様子が伝わってくるんじゃないかなと思います。

このハローキャリアワークでは、企画の立て方、調べ方、まとめ方、グループの作り方、

全て子どもたちに考えてもらったのですが、自然とグループを組んだり、力を合わせたり、調べ方も自分たちで考えたりして課題解決に向かっていました。

最終的には、子どもたちが企業の方、そして旅行会社のプロの方々に自分たちのアイデアをプレゼンし、その中から無事に子どもたちのアイデアが採用されました。私が驚いたこととしては、小学校3・4年生でも自分たちが学校で身につけた力を活用して社会の課題を解決することができるんだなということを感じました。学校の勉強が子どもたちの未来につながっているという思いをより強く感じたところでした。

活動後には、それぞれ体験で終わりとならないように振り返りの時間を大切にしています。自分の力が発揮できましたかとか、自分のよさや課題が見つかりましたかといった質問項目によって、子どもたちが活動を振り返れるようにいたしました。このアンケート結果を分析し、子どもたちにフィードバックしたり、本活動をよりよいものにしようと改善したりしていきました。

また、活動後に御協力いただいた企業の声も聞いたんですけども、子どもたちにこんなに力があると思わなかった、夏の商店街のお祭りでも子ども実行委員会というのを立ち上げて協力してもらおうと、地域がそういった子どもたちの力をさらに広げていったりとか、または活動に参加した児童の校長先生にお話を伺ったところ、体験後に戻ってきた参加児童が学校の活動でリーダーシップを発揮してくれたなんていうお声も伺いました。

また、昨年度、この活動が認められ、文部科学省と経済産業省から表彰状をいただきました。

STEAM教育もハローキャリアワークも世田谷区教育振興基本計画に基づいて行っております。そこでは子どもを主体とした教育への転換をうたい、初めのページに大切にしたい考えとして、次の3つの言葉が書かれているので御紹介します。

自分のよさや可能性を信じる。自分のよさや可能性を伸ばし、学び合い、支え合いの連鎖が広がること、人がつながり誰一人取り残すことのない社会をつくる礎になります。

違いを認め、思いやり、学び合う。一人一人が互いを高め合い、認め合う関係性は持続可能な未来を構築することにもつながります。新たな価値観を育みながら自分らしく過ごせる関係づくりが重要だと考えております。

社会の創り手として行動する。いかに社会が変化をしようとも、一人一人が未来に向けて自らが社会の創り手となり、持続可能な社会を維持・発展させていく意識と意欲を身につけることが必要であると、こういったことに力を尽くしていきたいと考えておりました。

○稲統括指導主事 また、この教育振興基本計画の中に位置づけておりますキャリア・未来デザイン教育では、この図の下のほうの部分ですけれども、「せたがや探究的な学び」の推進が右側で、「キャリア教育」の推進がパズルのように真ん中で組み合わさっています。それを非認知能力の育成という一番下の部分で支えているという考え方です。本日御紹介したSTEAM教育講座は探究的な学びと強く結びついておりますが、自らの興味関心から体験的に学びを深めていくという経験は、まさにキャリア教育で育成すべき自分ができること、意義を感じることに、したいことについて学んでいくということにつながりますし、ハローキャリアワークでは、「キャリア」という名前がついていますけれども、先ほどからお話があったように、探求的に課題を解決していくというプロセスは、学校で探求的に教科で学んできたことを生かしていると思います。

また、STEAM教育も、キャリア・未来デザイン教育も地域と連携した取組になっているという点で重要だと考えております。地域との連携によって、子どもたちは学校の校舎の中とは異なる多様な社会的な場で学び、想像力や自己肯定感などの非認知能力をさらに高めていきます。この地域との連携については、各学校においても進めているところであります。御協力いただいております皆様に感謝いたします。

以上で、私たちからの発表を終わります。御清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 稲統括指導主事、高橋副校長先生、ありがとうございました。改めて大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

さて、この後ですが、10分間の休憩を挟みまして、第1部に御講演いただいた皆様がゲストに加えまして、区長と教育委員会による意見交換を行います。休憩時間に御質問を集めさせていただきます。会場で質問票に記入いただきました方は入り口付近の会場係員にお渡しください。オンラインの方はZoomのQ&A機能により質問をお寄せください。

それでは、これより休憩に入りまして、14時50分から開催させていただきますので、よろしくをお願いいたします。

それでは休憩に入ります。

(休憩)

○司会 それでは、時間になりましたので再開させていただきます。

これからは、前半の内容を踏まえまして、区長、教育委員会による意見交換を行います。また、前半で御講演いただきました皆様にもゲストとして御参加いただき、議論に加わっていただきたいと思っております。皆様、よろしくをお願いいたします。

なお、ここからの進行は、宇都宮教育総合センター長にお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○宇都宮教育総合センター長 それでは、教育総合センター長の宇都宮でございます。よろしくお願ひいたします。

まず初めに、御質問をたくさんいただいているんですけども、一番多かったねいろについて御質問をまとめさせていただきたいと思っていますので、まずそこから入らせていただきます。

ねいろの実践は大変素晴らしいです。このねいろの実践を世田谷中学校で何か具体的にやっていることはありますかという御質問なんですが。

○前田校長 世田谷中学校本校での取組ということになると思うんですけども、分教室も世田谷中学校なので、本校との交流があります。例えば大きな行事ですと、来週やります学芸発表会でねいろの子どもたちは劇をやります。運動会も一緒にやります。それから、ねいろ分教室の紹介を本校の子どもたちの前で紹介をしたりとかいった交流があります。ただ、毎月あるとかいうことになってしまうと、そこまではありません。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

さらに突っ込んで、時間割なんですが、もうちょっと詳しくお聞きしたいんですがというのがあるんですが、いかがでしょうか。

○前田校長 重なってしまうかもしれませんが、午前中は50分の授業を3時間やります。先ほどお話をした教科、基本的には学年別で行います。そして昼休みになりますが、午後の時間が1時間もしくは2時間、これは学年一緒になって、先ほどの探究の時間だけではなくて、様々な体験ですとか、それから表現に関する勉強を午後の時間にやっていくということになりますので、1時間遅く、9時半に1時間目が始まりますけれども、終わりは大体3時半頃に一日が終わっていきます。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

もう1問お願いします。家庭への持ち帰り、いわゆる宿題はありますかという御質問です。

○前田校長 日常的には宿題はほとんどないです。宿題としてあるのは、やっぱり夏休み中にここまでやっておこうとか、この中から選んでやっておきましょうというのはありますけれども、そもそも学習の到達度がばらばらですので、統一した宿題を日々出しているということはほとんどありません。

○宇都宮教育総合センター長 それから、ねいろの卒業生のほとんどの子が上級学校へ進学したというのは私も存じ上げているんですけども、評価について、内申についてはどんなふうに扱っていらっしゃるんですかという質問なんです。

○前田校長 本校と同じような定期考査もありますし、全ての教科が同じ基準で評価、評定を行っています。ただ、やはり登校が安定しない子もたくさんいますし、定期考査も受けられない子も中にはいますので、積極的に評価材料を集めた中で評価をしていくといったことを行っています。ですので、評価はありますし、進学先に届けるいわゆる調査書等での評価があります。ただ、都立でチャレンジスクールと言いまして、不登校の子どもがよく行く学校なんですけれども、そういったところで調査書が不要な学校も最近は増えてきています。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

まだまだたくさん御質問をいただいているんですけども、時間の関係上、ここまでとさせていただきます。

では、これから区長、教育委員会による意見交換会を行いたいと思います。

実は、教育総合センターでは、昨年度より世田谷のまちを学びの場に、〇〇に出会うまち世田谷というコンセプトでいろいろな事業を展開しているところなんですけれども、その土台となるところは、実は尼崎に私も訪問させていただいて、いろんな事例を見させていただいたのがありました。そして、今日の船木さんの御講演の中身、「地域づくりの視点から、学びの意味を捉え直したい～「学習する地域」づくりについて～」ということについて基調講演を行っていただいたわけなんですけれども、この船木さんの講演に対する感想や御質問等を伺っていきたく思っていますけれども、よろしいでしょうか。

澁澤委員、お願いできますか。

○澁澤委員 今までの総合教育会議とはちょっと趣を異にして、個人的にも物すごく深く考えさせられました。というのは、今までが浅かったという意味ではなくて、非常に哲学的なお話だったんですね。それで、そもそも学びとは何か、何のために学ぶのか。あの中では自分が何者であるかを自分に言って聞かせるというのが学びだということを例文で挙げておられましたし、それから、基本的には、ある意味では人生を主体的にどうやって考えていくかということをお大人も子どもも含めて絶えず学んでいくというのが学びの本質、そこから地域の教育も学校教育も社会教育も含めて、そこからもう1回学ぶということをお考え直すんだという視点を持たなきゃいけないなということをお改め考えさせられた

んです。

学校教育は、先ほどの前田先生の話にもありましたけれども、学校側がやっぱり中でまたいろんな議論があって、その中で子どもたちはみんなテンポも違うし、関心も違うし、気づくときも違う。要するに、学年が何年も進んでいく中で、どうやって一人一人になるべく合った形でいろんな気づきを提供する場を設定するか、いろんな仕組みを入れるとかという形で教育しようかということを一生涯懸念考えるんですね。

私も地域に入って地域づくりをやっている人間なので、地域に入ると、そこに住んでいらっしゃる方々は、もっと教育に関わりたいんだという方は予想以上に物すごくいらっしゃるんですよ。学校現場のほうから地域を見ると、今言いましたように、学校現場というのはこういうストーリーで教育を展開しようとしているので、その中でどうしても地域の方に手伝ってもらわないとならない場面があって、そのときに地域の方に手伝っていただくことが何となく地域協力だ、地域に開かれた学校だとどうしても思ってしまう。ところが、地域側に立つと、学校は自分たちにどうやって子どもたちを育てようとしているのかということをもっと伝えてほしいし、その中で自分たちがどこでどう積極的に関わっていくかというようなことを——やはりお互い子どもたちをよくしようと思っているんだけど、地域と学校というのものとの間の壁がなかなか高いのかなということを私はいつも思っていて、船木さんに尼崎の事例も含めてなんですけど、一体それをどうやって学校と地域がよりクロスしてというのかな、交わりながら子どもたちを全員で育てていけるようなものにはどういう考え方とか、どういう仕組みだとか、あるいはどういう発想というか、アイデアですとかが必要なのかなというものがあつたらいろいろ意見をいただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。

○宇都宮教育総合センター長 船木さん、よろしくお願いします。

○船木氏 ありがとうございます。一番重たいところに来ましたね。実はそんなに答えがあるわけではないんですけど、僕が尼崎のケースをお話したのは、学校とは実はそんなにうまく組み合っていないんですね。現場は私学の高校を借りたりとか、尼崎市には市立高校がありますので、市立高校を借りたりはしています。ただ、小学校、中学校とタイアップできているかというのと、学びの場づくりとか、地域全体が学びの場だよという話に関して言うと、公共施設とかは使えているんですけども、学校教育そのものとのリンクがうまくできているかというのはまだそんなにでもない。これは、都市部ではどうしても教育委員会の縛りというんでしょうか、そこがなかなか厳しくて、首長部局か

ら関わろうとすると、なかなか扉が開きにくいというのが実はありますので、その意味においては、今の質問にあまりお答えできないかなと思っています。

実は今日、お話ししていないんですが、根羽村という長野県に人口800人の村があるんですけれども、そこは義務教育学校になっていまして、学校は1つしかありません。小学校、中学校が一体化されていてというところで、そこでは本当に地域の人と学校が、子どもの数が全体で40人ぐらいしかいないとかということでもあるので、一体化せざるを得ないというより、することが前提になっている中で、どういうふうに教育、学びの場をつくろうかということが今動き出しているというようなこともあって、やっぱり危機感と状況に応じて日本全国の中ではいろんな状況があるかなとは思っていますというのが今の御質問に対するお答えで、あまりヒントになるようなことは言えないんですけれども、よろしいですか。

○濹澤委員 疑問だけ投げかけてなんですけれども、ありがとうございます。私もそうだと思います。その辺を逆にずっと私たちは探っていかなきゃいけないので、その先に例えば不登校の問題も、それからキャリア教育の問題も全部その中に山積しているんだろうなと思っています。

そのことを言ったときに今日一番感じたことは、私たちは自分が生きるために、あるいは自分の生き方をどうつくるために学んでいるのであって、決して就職をするために学んだりとか、将来、職業に就くために学んでいるのがキャリア教育ではなくて、まさに前田先生がおっしゃっていた幸福とは何なのかという視点に立って、私たち社会の大人側も、学校側も、それから地域も含めて考えていかなきゃいけない。そのことを私は今日とても印象的に受けたので、発言させていただきました。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

中村委員、元校長ということで、今の地域との絡みのところから講演に対する御感想等、お話しいただけるとありがたいんですが。

○中村委員 地域との連携ということは現役のときからずっと言われてきて、学校経営には欠かせない視点なのなんですけれども、ある意味私どもの世代というのは受験、受験でどっぷり浸かってきた世代で、勉強イコール受験のような育ち方をしてきたので、今日の学びの意味というお話を聞いて、僕は当然なるほどと思っていたのですが、残念ながら東京の都市部では、本区も例外なく、依然として小学校中学年ぐらいからの塾通いがスタートして小学校6年の2月1日の教室は閑散としているとか、ある意味、日本全体から見れば特

殊な地域であるかもしれません。

それから、当然中学になっても同じことが2年生の後半から始まるというような状況、そういった中で、学びの作戦変更とか、学習する地域づくり、こういった御趣旨のお話をいただきましたけれども、こういったことを私ども管理職はそういう話を聞くことが多いのですが、一般の先生たち、または保護者、こういった方にこの重要性をどうやって理解してもらうのか。特に本区や東京の真ん中辺の区部なんかは共通の悩みを抱えていると思うのですけれども、この辺をどうやって教員や保護者の方に理解していただくかというあたりで何かアドバイスいただけたらなと思っております。よろしくお願ひします。

○宇都宮教育総合センター長 船木さん、よろしくお願ひします。

○船木氏 これもアドバイスできるようなことはないと思うんですけれども、実は僕も受験世代なので、今日、話していることは何言っているんだ、おまえ、と30年前ぐらいの自分に言われているようなことかなと思ひながらお伝えをしているところなんですけれども、尼崎というところは実は45万の都市でありまして、都市部といえは都市部なんです。なので、今日も議論のすれ違いがあったら本当に申し訳ないんですけれども、小学校、中学校の子どもたちがどうかというよりは、大人がそういう姿勢を見せることによって子どもたちのスイッチが入るといふ機会は僕はすごく見てきているんですね。

サマーセミナーとかの動画があつたりするといふんですけれども、今日はその時間がないのであれだったんですけれども、子どもが先生をやつたりするんですよ。御自身の経験をしゃべつたり、関西なので、落語が好きな小学生が落語の話をするとかあつたりするわけですね。だから、受験、受験ばかりの話の未来は分かっているんだけど、自分自身の可能性を広げるといふことと、その機会があるといふことと、それを受け止めてくれる大人がいるといふ関係性をどういふふうに地域の中につくっておけるかといふのが、受験は受験でやらなきゃいけないけれども、自分の可能性を広げることと、それを受け止めてくれる地域の人と出会える機会もあるよねといふ、ダブルスタンダードではないんですけれども、そういうような状況。そのこと自体を多分学校の関係者の皆さんが御理解をいただくかどうか、また、尼崎もやっぱり教育委員会の中は閉じている部分があつて、現場ではそういうことが起きているけれどもといふところに公立の先生がいらつしゃるかといふ、その数はどうしても少なくなるので、その辺が少し重要なポイントかなとは思ひます。答えになっていないですけれども。

○宇都宮教育総合センター長 よろしいですか。

では、長年保護者の立場でいらっしゃった鈴木委員、よろしくお願いします。

○鈴木委員 まず船木先生、御講演ありがとうございました。私もPTA活動を長年携わってきていましたので、地域の方々、学校の方々と先生方などいろいろな会話だったりをしてきましたが、私から見て世田谷区は地域社会全体で学びを大切にしていくという土壌はあるかと常々感じていました。もともと世田谷という土地柄というか、町の歴史を見ても、学んでいこうという遺伝子というものは既に存在していて、ただ、その記憶をどのように呼び覚ますのかというのが課題かなと思っていました。

その呼び覚ますきっかけが近所の神社の祭りだったり、PTAや各学校や地域の人と一緒にやるワークショップだったり、教育委員会の世田谷区わくわくサマープランだったり、ささいなことでもいいのかなと私は思っています。親子でそういうことに参加することによって、学びの場所、作業する場所などの居場所を自らつくる、見つけるということが大切であって、そして、この学習する地域づくり体験というのは、保護者としても、子どもとしても、それぞれ自己有用感だったり、自己調整感、自己安全感などを高めて自尊心感情を形成するのにとても役立つのかなと思っています。結果的にそういうことをしていくことによって、地域の学びの力が底上げされていくのではないかなと考えております。

あと、先生のお話の中で、対話が大切というお話がありましたけれども、前に私が聞いた話だと、会話よりも対話、こちらのほうが大切だと。結局、会話は合意を目指すこと、結論を出すことだけれども、対話は結論を出さない、合意も要らない、ただ言葉を交わすだけ、やり取りするだけの井戸端会議的なものであるという話を聞いておりました。

先生にお聞きしたいのですが、そういう井戸端会議的なものの中に大きなヒントが隠れているのかなと思うのですけれども、そのあたりの御意見がございましたらぜひ伺いたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○宇都宮教育総合センター長 船木先生、お願いします。

○船木氏 先生じゃないと言っているじゃないですか。ありがとうございます。対話に関して言うと、実はいろんな人がいろんなことを言っているんで、僕はたまたま今日平田オリザさんのお話をお伝えしているんですけども、今の井戸端会議というふうなお話に関して言うと、井戸端会議みたいなことはすごく大事だよ、それは心理的安全性があって、自分自身のことを素直に言って誰も否定する人もいないし、受け止めてくれる人がいるし、いろんな意見があるわよねとか言いながら学ぶという場のことがまず1つあってというのが多分あると思うんです。

僕自身が今のお話を聞いて少し感じるのは、日常の暮らしの中の困り事とか気づき、先ほどハローキャリアワークの中でも子どもたちの気づきからというお話があったと思うんですけども、日常の気づきを実は言語化してくれるのは井戸端会議だったり、何気ない一言だったりすると。保健師さんとか、地域の人たちの困り事を聞くという健康学習みたいなことのきっかけというのは実はその中であって、おばちゃんたちがしゃべっている中に入っていったというのが信州の健康教育の出発点だったみたいな話があるんですけども、ちょっとした一言の中にセンサーが反応できるようなことをつかまえて、それって実はそういうことよねという、ここからが、ただの水平のおしゃべりが次の気づきと学びと協働型の対話に行くすごく重要なポイントなんです。最初から対話しようという対話なんかできるわけではないので、きっかけがあって、そういうようなフランクだったり、フラットだったりする関係性の中から次に行くという意味合いにおいて、井戸端会議とか、対話というのはすごく大事なんじゃないかなというのは今改めて少し感じたところです。

多分それが日常の風景なんだろうと思うんですね。ただそこで終わっちゃうのか、次に行くのかというのが実はすごく重要で、そこは多分ファシリテーションとか、気づく人とか、実はそれってみたいな話になるような日常がそこかしこにあるというのが学習する地域の出発点かなんていうことはちょっと思ったりしました。ありがとうございます。

○宇都宮教育総合センター長 よろしいでしょうか。大丈夫ですか。分かりました。

では続きまして、知久教育長、よろしくお願いいたします。

○知久教育長 大人こそ学びが必要、興味深く聞かせていただきまして、ありがとうございました。

学習する地域づくりに関連して、世田谷の現状と伺いますか、私が仕事で関わったことを振り返りつつ、お話をさせていただきたいと思います。

15年ほど前、ちょうど団塊の世代が60歳を迎えて地域に帰ってくるよということで、団塊の世代をどう受け止めていこうかという生涯現役プロジェクトを区で担当した時の話です。そのときに様々な地域活動に取り組む団体にお話を伺いました。防災であったり、環境づくりであったり、健康づくり、また、子育てとか、環境美化、そんな中、竹とんぼ作りを通じて地域の活性化に取り組むといった方もいらっしゃいました。その中の団体の一つ、子育て団体が、現在、中学校の生徒向けの赤ちゃん訪問ということで、赤ちゃんを連れて生徒たちに触って体験をしていただくというような活動をしていただいている、生徒は赤ちゃんとなかなか接する機会がない中で興味津々であったり、また、こんな赤ちゃ

ん時代を育ててくれた保護者に感謝をしているなんていうお話も聞いています。このネットワーク自体、その団体たちが横でつながって生涯現役ネットワークという、団体をつくられて、それから10数年続いているという経過がございます。そういう様々な分野で活躍される団体が世田谷を、地域を下支えしていただけているのかなと思いました。

私からは以上です。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

保坂区長、よろしく申し上げます。

○保坂区長 船木さんのキーワードてんこ盛りのお話は大変面白かった。改めていろいろ気づかされました。とりわけ、大人こそ学ぶべきではないかというようなあたりのことはそのとおりだと思います。

お話を聞きながら、一応手帳に挟んであるんですが、先ほど冒頭で取り上げた世田谷区教育大綱では、「学ぶとは、自分自身を見つめ直すこと」で始まり、2番目のセンテンスのところに「これからの時代、最大の課題は『人類と地球の共存』となる。しかも、にわかには正解のない難題であり、子どもと大人は険しい道を行かなければ生き延びることが出来ない時代だ」と書いてあるんですね。ぜひ船木さんに教育大綱の読み解きを今後またやっていただきたいと思うんですが、ここの特徴というのは非常に際立っていて、つまり、これまでの教育というのは、知っていることを知らない子どもに伝える、教えるというベクトルであったと。しかしながら、例えば今日もそうですけれども、10月でこれだけ暑いという、やはり気候変動、気候危機が予想以上に進行していて、大人の実感以上に、当事者として被害を受ける次の世代である子どもたちは、ビビットにここを感じて調べたり、どうにかしないと大変だ、だから何ができるんだろうと考えている。少なくとも、何とかしなければというそのテンションにおいては、大人より子どものほうが高いんですよ。こんな感じかな、最近はちょっとおかしいな、異常気象だねと言っているうちに災害だらけの毎日になっているというあたりで、大人と子どもが立場を入れ替わりながら、子どもから聞いて、そうだねということで大人が経験を少し出したり、共に学んでいくということはすごく大事じゃないかと。

かとする、教えたい大人たちもたくさんいて、それはある種確立しているというか、これが技術としてとか、知識として正解だというものを子どもに伝えたいという、それはそれでまだまだ必要だと思うんだけど、やっぱり一方で、私たちも含めて、子どもと共に自分たちがいかに知らなかったか、もっと言えば愚かだったかということ、子どもた

ちにこういう結果を押しつけてしまっているのが我々大人の責任なんですね。そういうことと言うと、学習する地域というのはとても魅力的なワードで、そこの中で多分地域が変わるといえるときに、教育委員会と首長部局との間の話もされましたけれども、やっぱり学校教育そのものも、後半に話が出るとは思いますけれども、新たに変わっていかねばいけないんじゃないかと。つまり、既存の知の体系で習得するプログラムに従ってというようなことで果たしていいのかということや学習指導要領をめぐる議論でも今されているようにちょっと伝え聞いていますので、ちょっと感想になりましたけれども、そんなことを思いました。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

船木さん、何かありますか。ないですか。分かりました。ありがとうございます。

次に、事例発表していただいた2組に対する質問とか、御感想を皆さんにお伺いしていきたいと思っておりますけれども、その前に、先ほど前田校長からお話のあった世田谷中学校の学びの多様化学校の分教室「ねいろ」の令和4年4月の設置から、令和8年4月の開校予定の学びの多様化学校開校に至る経緯についてちょっとお話ししたいと思っております。

不登校児童生徒数の増加によりまして、不登校の生徒の状況に合わせた多様な学びの場として、世田谷中学校の分教室「ねいろ」の多様な学びは、一人一人の生徒に基礎的、基本的な学力や体力の向上、社会性や基本的な生活習慣を身につけることを重点に教育活動を行って、社会的な自立を図ってまいりました。しかし、不登校児童生徒数の増加は続いておりまして、令和6年3月に不登校支援ガイドラインを策定する過程で、この分教室「ねいろ」の成果が素晴らしいということで、これを生かした学びの多様化学校の開校を目指すために、令和6年6月に基本構想をまとめまして、現在、基本計画策定委員会を設置いたしまして、詳細な計画策定を進めております。

開校に当たりましては、旧北沢小学校跡地を活用させていただいて、学びの多様化学校とほっとスクールを開設するとともに、仮称でございますけれども、北沢ベースというふうにして、子どもの居場所（きたっこ）と、図書室の地域利用による住民交流の場、学校運営に参画する団体の拠点となるスペースなどの地域の拠点として活用していただける複合施設となる予定でございます。この基本計画は令和7年3月に決定し、令和8年4月の開校に向けて準備を進める予定でございますので、この場をお借りしましてお知らせをしておきたいと思っております。

さて、先ほど発表していただいた学びの多様化学校「ねいろ」なんですけれども、全国的にも初めての学びの場でありまして、実はゼロなのか、マイナスなのか、そこから初めて、前田校長先生が教育課程をつくられてまいりました。先ほど発表していただいたのは3年間にわたる、いろんな紆余曲折があつてのものだとお聞きしていますが、そこら辺の思いをちょっと前田先生、もう一言語っていただけるとありがたいんですが。

○前田校長 現在、ねいろ分教室の在籍が42名います。開設しました令和4年4月は20名のスタートでした。その頃ずっと思っていたのは、不登校を経験したり、不登校である子どもたちが集まってくるので、4月からスタートして、この子どもたちがみんな不登校になってしまったらどうしようということを本当に考えました。結果的にだんだん規模が大きくなっていったのは、やはり子どもたち一人一人が中学校生活を実現させようという意欲を持てたことと、教員、先生たちがその意欲を引き出すことができたからかなと思っています。その意欲を引き出すというのは、やはり子どもに任せるだけでは僕は駄目だと思っていて、そのための仕掛けが必要だなと思います。

私は、一つのキーワードで、つながるということがすごく大事だと思っています。子ども同士がつながるということ、それから、先ほどの新しい学校が複合施設型という言葉がありましたけれども、やはり世の中、社会とつながっているということが子どもたちのチャレンジ意欲をかき立てるにはとても重要なことじゃないかなと思っています。

もう一つ、やはりその生徒一人一人が自分の時間軸でつながると考えたときに、不登校という過去を挫折とか、失敗とか、後悔だと思わせない。そうしたことを大人が意図することが子どもの意欲につながるんじゃないかなと考えています。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

世田谷中の校長先生でもあるわけで、世田谷中には実は自閉症・情緒障害学級と知的障害学級、それから通常学級と、かなり大きな学校であります。ねいろでの実践というのは、実は自閉症・情緒障害学級でも知的障害学級でも通常学級でも僕は生かされているのかなと。一人一人に寄り添った学びというのができているのかなと思っています。

では、このことに関して、澁澤委員、いかがでしょうか。

○澁澤委員 偶然、私は今週ねいろにお邪魔させていただいて、生徒さんたちの学ぶ風景を見てきたんですが、私が想像していた以上というか、すごくびっくりしたのは、全員が学びたいという意識がこんなに強いんだと、子どもたちを見ていると思いました。確かに、不登校という枠組みの中にかかった子たちですから、何となくみんなと一緒に勉強でき

ないという子も当然いますし、それから、自分はペースがまだ違うということも思っ
ていらっしゃるお子さんたちもいて、お子さんたちは多様なだけども、ベースにあるのは
全員が学びたいという意識がこんなに強いんだ。これはやっぱり社会としてちゃんと対応
してあげなきゃいけないなということがよく分かった。

それと、私は世田谷区に住んでいて、しかも教育委員会にいながら、何もねいろだけ
ではなくて、ねいろにも来られない子たちの集まる場所、例えばほっとルームだとか、ほ
っとスクールと言われているようなところ、あるいはそれすらも行けないという子どもた
ちに対するまた別のほうからの支援ですとか、非常に網羅的かというと、多方面から子ども
たちにアプローチするシステムができています。だけれども、世の中というのはシステム
だけでは絶対変わらなくて、そこに今度は御両親も保護者も含めて、あるいは今日のお話
の一つの地域も含めたみんなでそのシステムを生かしていく。しかも、みんなが主役であ
りながらそれを生かすことによって生きてくるシステムというものが私は世田谷が今目指
しているものだなと思っていました。

最後に前田校長先生が卒業生の言葉を載っけられていますけれども、高校に行って、も
しかしたら、また不登校になるかもしれません、しかし、私は不登校になってもまた道は
開けると考えています、それは、私たちには、不登校になったけれど、ねいろ分教室で元
気になった経験があるからです、打たれても立ち上がる、その経験を通して、私たちは本
当に強くなりましたという卒業生のコメントがあって、これがもう全てだと思います。

不登校という言葉があるのは世界では日本と韓国だけだとよく言われます。ほかの国は
人生の中で生きていく場所というのは非常に多様だというのは当たり前だという価値観、
学校というものに自分を合わせないといけないという価値観をある意味では押しつけてき
た今までの日本という形があるんだと思います。その中から、やっぱりこれからの社会と
いうのは、そんなことで価値観を押しつけるのではなくて、みんなが学びたいという意識
を持っている子どもたちにどう寄り添って、一緒にその夢を実現させるかを区民全員でと
いうか、人類全員が考えていかないと、次のチャンネルが変わっていく時代というのは切
り開けないんだなということを私はねいろに今回行かせていただいて物すごく感じて、大
変感謝している次第です。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

続いて、中村委員、よろしいでしょうか。

○中村委員 前田先生、ありがとうございます。先ほど質問の中にもやっぱりありまし

たけれども、特にねいろや、これから新しくできる学校についても、進路というものは皆さんかなり関心の高い部分になってくるのではないかなと思っております。

くしくも、私は今、教育関係の新聞で本の書評を担当していますが、最近、「特別支援が必要な子どもの高等学校進学の話」という本を読みました。これは、不登校及び特別支援学級に通っている生徒たちにどんな高校進学の可能性があるのかということを書いて紹介しているものなのです。書いている方は岐阜県の小中学校の教員をやられて、その後に教育委員会の行政で就学支援を担当して、とうとう自分で高校をつくってしまったという方なのです。なので、全国的にも受け入れる高校は確かに増えております。今いろんな可能性が増えつつあるのですが、前田先生に伺いたいのは、ねいろとして進路指導でどういうことを心がけているのか、また、新しい学校には進路指導でどういうことを期待するとか、こんなことに気がつけたほうがいいよというアドバイスなどがあれば、お話を伺いたいなと思っております。

あと、今、澁澤委員の話にもありましたが、こういう学びの多様化学校に行きたくても行けない生徒もたくさんいると。そういった子どもにどういう機会を与えることができるのか。僕は、一つの可能性として、千代田区に昔から通信制の中学校がありますけれども、今オンラインが発達していますから、多様化学校の通信制コースというものも今後検討されるべきかなと個人的には思っております。では、よろしくお願いします。

○宇都宮教育総合センター長 前田先生、よろしいですか。進路指導で気をつけていること。

○前田校長 ねいろに通っている子どもたちの進路選択が単線型にならないようにしたいなと思ってます。自分は不登校の生徒だったから、そうした子どもを受け入れてくれる上級学校に行くものだから、そうではないところには行けないかもしれないとかいうふうに思ってほしくなくて、やはり子ども自身の力で多様な進路の中で自分に合ったものを選ぶ力、それから、次に行ったときに、こういうふうに頑張りたいと思う力を備えられるようにしたいなと思ってます。現実的に、やはりまだ自信がなくて、通信と通学の併用型の学校に行っている子もいますし、それから、昼間の全日制、通常の高校生活といふかな、特別な不登校の子が集まる学校ではない学校に進学をして、そこで今輝いている子もいるので、進路が多様であることは間違いないので、それはしっかり応援していかなくちゃいけないなと思ってます。

○宇都宮教育総合センター長 今おっしゃられた中で、やっぱり一人一人の生徒をよく見

取った上で進路指導していく。そのためには少人数である必要があるということも一つの条件かなと思いました。ありがとうございました。

鈴木委員、よろしくお願いいたします。

○鈴木委員 私としては、このねいろが、子どもだけでなく、悩んでいる保護者にとっても一筋の光になってほしいなと思っています。不登校の子どもたちは年々増え続けていて、フリースクールなど学校以外の居場所の選択肢が増えていますが、ただでさえ大変な子育ての途中で多くの子が進む道から我が子が離れていくというのはとても大きなプレッシャーになっていると思います。また、不登校の問題は周りに相談しにくい側面もありますし保護者自身が周りに心配をかけたくなかつたり、理解して耳を傾けてくれる人ばかりではないということも事実だからです。これらの理由から不登校の保護者が疲れてしまうのは当然のことなのですが、親の孤独感の解消、不安の解消になり、子どもと共に保護者も笑顔でいられるようなねいろになってほしいと私は願っています。

前田先生に1つ、保護者との関わり方についてお話しできるようなことがございましたら、ぜひお願いしたいと思います。

○前田校長 保護者会というのは当然ありますけれども、やはり不登校というものを抱えている子どもの心理面だとかをカバーしていく保護者の立場に対する助言ができるような保護者会を定期的に設けているといったことがねいろの保護者会の一つの特徴です。

それから、区で行っている様々な不登校相談とは別で、世田谷中学校としての不登校保護者会というのをやっています。それはねいろだけではなくて、本校にもやはり不登校の子どもはいますし、そうなりそうな心配な子もいるので、不登校に対する捉え方とか、そうしたことで少しでも安心してもらえるような保護者会を年2回ですけれども、行っています。

先ほどの新しい学校のところでカウンセリング機能の充実ということを1つ期待として挙げました。教員は頑張りますが、心理の専門家ではないので、子どもの心理的なケア、プラス保護者の心理面での支援といったものも機能としてはとても重要じゃないかなと考えます。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございました。

鈴木委員がおっしゃってくださったように、教育総合センターでも定期的に不登校の保護者の方々の相談会を開いていますので、一般の方にもそれをお知らせしているような状況でございます。

では続きまして、知久教育長、お願いします。

○知久教育長 前田先生、御報告ありがとうございました。

報告の中で、令和5年度卒業生の言葉がありました。私は不登校になってもまた道は開けると考えています、それは、私たちには、不登校になったけれど、ねいろ分教室で元気になった経験があるからです、打たれても立ち上がる、その経験を通して、私たちは本当に強くなりました。この言葉がすごく印象に残りました。ねいろ分教室を通じた学びで子どもたち自身が心身ともに成長されたということももちろんありますが、保護者や家庭、ねいろの前田校長先生をはじめ、教職員の方々、こうした方々に声を出せば受け止めてくれる、真剣に寄り添ってくれる、そんな大人たちがいることを子どもがねいろで学んだということが非常に大きかったんだと感じています。この先、卒業した彼らも成長する過程できっと悩みや挫折を経験することがあると思います。その際も声を出して助けを求められることができる、受け止めてくれる大人がいることをここで学んだ。これが卒業した生徒たちの大きな糧になっていくのではないかと思います。

あと、新たな学びの多様化学校のお話があったので、1つ、こうした学校にしていきたいということでお話をさせていただきたいと思います。

1つは、やはり子どもたちの声を大切にしたいと思います。この4月からスタートした教育振興基本計画の中で新たな学びの多様化学校を位置づけておりますので、御紹介させていただきます。「教育総合センター開設後に培ってきた大学や企業等との地域連携やSTEAM教育の実践、また令和4年4月に開設した『ねいろ』の運営での知見を踏まえつつ、これまでの学校システムに子どもたちが合わせるのではなく、不登校を経験した子どもたちそれぞれが思い描く通いたくなる学校像を希求し、彼らをありのまま受け入れる新たな特例校の開設に向けて検討します」とうたっております。これは、教育委員会は、教員が考える、こうあるべき学校ではなく、不登校を経験した子どもたちが思い描く通いたくなる学校をつくっていかうとするものです。

ねいろの御報告でもありましたが、体育の内容を自己決定するお話ですとか、学校行事を自分たちが決めているというお話もございました。ここには令和5年4月に施行されたこども基本法の基本理念でうたう、全ての子どもたちについて、自己に関係する全てが優先して考慮されること、また、意見が尊重され、その最善の利益が優先され、考慮されていることなどが反映されているものと思います。また、子どもを主体とした教育への転換を掲げる教育振興基本計画にも通じるものです。

また、この先、子どもの意見を聞くこと、子どもの最善の利益を優先する、こうした子どもの権利を尊重する視点を新たな学びの多様化学校でも一つのキーとなるコンセプトということで取り組んでまいりたいと思います。

以上です。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

保坂区長、よろしく願いいたします。

○保坂区長 ねいろが今40人で展開されているというお話を聞いて、改めて考えることが大変多かったんですけども、ねいろのプログラムの中でお話を聞いていくと、やはり子ども自身が選んだり、判断する。それから、その選んだり、判断するには時間と機会が必要。また、その環境、あるいは待つ時間というのも必要。しかし、そういうところをしっかりとしていくと、子どもたちは、船木さんの話にもあったように、振り回される客体からつくり出す主体へと少し重心移動を始めるということかと思います。

実は、ねいろもそうなんですけれども、では、世田谷中の学校でできないのかという声は当然いつも出てくるんですね。しかしながら、今、不登校特例校という形でまずフレームができて始まって、試行錯誤の中である。その中で分かったこと、見えてきたことがある。また、北沢小学校跡で今考えられている学びの多様化学校の構想は、まだはっきりと全部決まっているわけではありませんが、1つ新型コロナの経験というのを私は思い出しますけれども、世界中が同じウイルスにいわば揺さぶられて、多くの方が亡くなったんですね。ウイルスとしては株が違うというのはちょっとありましたけれども、公衆衛生の基本としては、やはり徹底して検査をして隔離をして、またその後はワクチンというようなことになっていくんですけども、日本は随分立ち後れてしまったというのは正直感じます。

実は、日本の教育は長いこととても成功しているという神話があって、日本型教育で優れた労働力が生まれて、だから日本の企業はすごいんだと10年前まで言われていたんですね。私もそう思っていました。しかし、どうもそういう時代ではなくなってきたのかなと。保護者の間の例えば受験圧力とか、いわゆる偏差値的な学力信仰みたいなものは、古い時代の成功モデルにはぴったりしていたかもしれないけれども、全体として、日本のいわゆる進学校と言われる大学のランキングも世界的には落ちているし、新しい時代の、つまりこれは世界的にコロナの後、大きなトレンドとして一斉授業から個別学習へ、また、学力テストからプレゼンテーションへ、抽象的学習から世の中の具体的な事象に入り込みなが

らの学びとかいうことで、やっぱりすごく大きく変わってきたんじゃないかな。なので、これから議論をはっきりとしていきたいと思えますけれども、やっぱり世界のそれぞれの国がコロナ後を受けて、そしてこの気候異変を受けて、子どもたちの教育の学びのスタイルがどうあるべきなのかということを一生涯懸命探っているということも我々は謙虚に知りながら、そこをまずはプログラムとしてでき得ることをやってみる。それは世田谷区全校の学校で一斉に、せえのでできればいいんですけども、なかなかそれは難しい。となれば、まずいろいろで今やられたことも、それから、後半のSTEAM教育とか、キャリア教育とかでやっていることも、実績と1つ手応えが出てくれば広がっていく要素があるのかなと思うので、そのあたり、前田先生はどういうふうにお考えかなというのをちょっと聞いてみたかったですね。

○宇都宮教育総合センター長 先生、よろしくお願いします。

○前田校長 すごく難しい質問だなと思いつつ今伺っていました。やはり子どもが判断するには、待つ時間とか、ニュートラルな時間というのはとても大事だと思います。そういう時間を大事にしようと教員の意識改革は徐々に進んでいるなと私は思っています。

一方で、子どもが学びたいと誰でも思っている。大人は大人で、教員はやっぱり学ばせたいという気持ちが結構強くて、そことのバランスかなと思います。学ばせたいは教員のモチベーションではありますけれども、子どもの学びたいをどれくらい生かせるかということがこれからの学びの中では結構大事なことじゃないかなと感じています。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

では次に、STEAM教育講座とハローキャリアワークについての発表についてですけれども、教育振興基本計画の教育目標、「幸せな未来をデザインし、創造するせたがやの教育」というのを達成するためのキャリア・未来デザイン教育を推進する一翼を担うものになっております。今までにこのキャリア教育の取組は、令和4年度に文部科学省、経済産業省、厚生労働省のキャリア教育推進連携シンポジウムで文部科学大臣賞を受賞しておりまして、令和5年度につきましては、文部科学省、経済産業省のキャリア教育推進連携表彰の奨励賞を受賞しています。今年度は、まだちょっと言えませんが、地域と共につくり上げたキャリア教育を進めてきた学校、学び舎を推薦して上げております。受賞しましたらまた御報告ができればいいなと思っています。これらの取組をゼロから始めてきた高橋副校長先生、思いを語っていただけますか。

○高橋副校長 ありがとうございます。私がということではないんですが、本当にたくさんのお力をお借りして行っていたところです。

先ほど前田先生のお話の中でもつながりというお話があったかと思うんですけども、当時のことを思い出すと、私もつながりというのはキーワードだったなと思い返していたところでした。

ハローキャリアワークにつきまして、当時、教育委員会が感じていた課題として、学校の教育に地域や社会をつなげていくということを考え、達成を目指していたところです。当時の機運として、学校の働き方改革であったり、不登校の児童生徒の増加ということもありました。そういった中で企業や地域と力を合わせて教育をしていくことがその解決に向かうんじゃないかな、つながっていくということは大切なんじゃないかということたくさん職員の職員と話していたところです。いろいろな興味関心がある子どもたちが、学校だけではなく、様々な学びの場をつくることが子どもたちのためになるんじゃないかなんていう思いで取り組んでいたことを覚えております。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

稲統括、いかがですか。

○稲統括指導主事 ありがとうございます。先ほどセンター長から、今年の賞の話で地域と連携して頑張っている学校さんを推薦ということもあったんですけども、今日、私は学校外の取組について主にお話ししたんですけども、学校でも多様な学びとか、地域と連携したキャリア教育というのは本当に広がってしまっていて、その中心となっているのは、本当にやる気のある、頑張っている先生方なので、ちょっとそれをお話ししたいかなと思いました。

昨年度から世田谷区ではキャリア教育推進リーダーという先生方を委嘱しまして、やりたいと言ってくださった先生方、今年だと小学校7人、中学校9人、計16人の先生が手を挙げてくれました。その方たちと会議をするんですけども、もう時間ですよと言わないとずっとしゃべっているんですね。キャリア教育について考えたり、研究したり、どうしていこうというふうには、楽しくてしょうがないし、本当にやる気にあふれた先生方で、この先生方がいれば世田谷区のキャリア教育は大丈夫だなといつも思っています。

私たちが教育委員会としての取組を考えていくに当たっても、こういう先生たちの思いとか、今までの実践とかに大変刺激を受けてつくっていていますので、これからも先生たちと学校と一緒にいろんな取組を進めていきたいなと思っています。

以上です。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。先生方にも実は同じような取組をしていて、先生たちを学ばせるんじゃなくて、例えば今のキャリア教育推進リーダーとか、ICTのインフルエンサーとか、それから探求的な学びのワーキンググループとか、これをやってみませんかというのをお声がけして、手を挙げて、そういった先生方をピックアップして集めて、教育委員会のほうでいろんな事業を推進しているということがある。だから、先ほどお話があったように、先生たちの学びのベクトルも少し変わってきているということをお知らせしておきたいと思います。

それでは、このキャリア教育の発表について、御発言がある方はいらっしゃいますか。ごめんなさい、時間がなくなってしまったので、御発言がある方をお願いしたいんですが、よろしいでしょうか。

○澁澤委員 キャリア教育、やはり特に会場の皆さんやZ o o mを見られている区民の方にお伝えしたいんですけども、今までキャリア教育は職業選択へ向かっていく、どういう職業に就くかということ子ども頃からいろんな接点をつくって行って、職業体験をさせながら自分のキャリアを考えさせるというのがキャリア教育だったんですが、今の私たちがずっと言っているキャリア教育というのは全く意味が違って、それは、人生の生きる意味を問う、そのために働くということなんだというような姿勢を持って生きるということを考える。分かりやすく言うと、今まで私たちの社会はD oをずっと求めてきました。何をやるかということ求めてきましたけれども、やっぱりこれからの社会はB eを求める子どもたち、あるいは私たち大人も含めてB eを考えていかなきゃいけないんだと思っています。まさにミーニング・オブ・ライフ、要するに、そのために私たちは働くのであり、そのために学ぶのであると思います。

ですから、単なる職業体験を子どもたちにさせているわけではなくて、まさにその幸せとは何なのか。先ほどの前田先生の発表の中にもあった、そこから全てをスタートして、どの子どもも、そして、あそこに参加している先生個人一人一人も自分にとって本当にキャリア教育とは何なのか、自分のキャリアとしてどうやってこれからまた生きていくものをつくっていくのかということと共に考えていくというのが新しい教育だということをお理解いただけるとありがたいなと思っています。

○宇都宮教育総合センター長 澁澤委員、引き続き、今日のテーマであった「子どもたち一人ひとりの個性を引き出す多様な学び」という視点で、今後の世田谷の教育に期待する

ことを一言言っていただけるとありがたいです。

○澁澤委員 この教育大綱をつくったときにスタートしているんだと思うんですが、大人と子どもが同じ視点でお互いを刺激し合いながら社会を築いていけるか、その仕組みをどう実現していくかということをやっぱり真剣に考える時期なんだと思います。今日は不登校というくくりで話が出ましたけれども、決して不登校ではなくて、みんながいろんな形で学んでいくこと、それをまた認め合って、そして未来の、今、解のない地球との共存という問題をどう私たちが向き合うか、そしてそれを地域にどう落とし込むか、そんな形に育てていければいいなと思っています。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

中村委員、同じ質問で申し訳ないんですけども、「子どもたち一人ひとりの個性を引き出す多様な学び」の視点での世田谷区の教育に対する期待、思いを語っていただいてもいいですか。

○中村委員 私が現役の頃は全国の校長会の仕事もしていて、全国の教育情報に触れる機会があり、現在も公益法人で似たような仕事をしていますので、そういった中で、世田谷区を取組というのは全国的にも非常に進んでおります。コミュニティースクールやキャリア教育、この学びの多様化学校もそうですし、いろんな点で進んでおります。要は、世田谷区が先進的にやっている取組を区民の皆様及び学校の先生、それから保護者など関係者の皆様はどうやって普及啓発していくのかというあたりが一つの課題かなと思っています。

キャリア教育の話聞いていても、今後の課題としては、中学校では職場体験がずっと前から続いていますけれども、こうやって優れた新しいハローキャリアワークというプログラムができたことによって、今までの中学校の職場体験も少し中身を見直してバージョンアップしていかないと、やっぱりうまくないのかなという感想も持ちました。どちらにしても、世田谷区はこれから先もいろいろ先進的な取組をされていくと思いますので、ぜひこれからも皆様の御協力を賜ればと思っています。よろしく願いいたします。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

鈴木委員。

○鈴木委員 学びの多様化学校等、様々な取組は、子どもたちがこの先、一生を通じてよりよく生き、幸せになることが最終目標だと思っています。このような多様な学びに対して保護者の立場からとしては、学びの多様化学校や体制について、子どもが望む形で社会

的に自立することを目指すことができる場であってほしいと思っています。そして、それが継続されること、実はこれが一番難しいことだと思います。始まりは勢いもあって目標に向かって動きますが、ある一定の時期を過ぎると熱量も下がっていきます。その熱量が下がったときが一番大切なのかなと思います。社会情勢など環境の変化に対応しながら、子どもは人間であり、自由な主体として生きる一つの人格であるということを私たち大人は常に心して、子どもたちとの学びを守っていくことが責務かなと考えております。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

知久教育長、お願いいたします。

○知久教育長 今日の会議のもう一つの大きな話題は、やっぱり地域だったと思います。地域と共にある学校を区内90校でさらに進めていくことが必要だと思います。今回検討しております新たな学びの多様化学校ですが、これは学区制の学校ということではなくて、全区から来ていただくこととなります。地域の子どもたちが通うというわけではないんですが、昨年度、他府県の不登校特例校を幾つか見学させていただきました。そうした中の学校では、やはり地域との結びつきが大切ですよということをお聞きしてきました。地域の運動会、あるいは美化活動などを不登校特例校の子どもたちと一緒にやっていますよという事例等もお聞きしてきました。ぜひ地域に応援していただけるような学校づくりを目指していきたいと思います。

以上です。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

では、保坂区長、最後に今日のまとめをしていただけるとありがたいです。よろしくお願いたします。

○保坂区長 お話を聞いて感じたのは、やっぱりいろいろ抽象論として学校を変えるというような話ではなく、具体的に、例えばねいろもそうですし、STEAM教育講座、また、ハローキャリアワークという形で、学校ではなく、この教育総合センターという場を通して高校生が子どもに関わったり、また、町の中とか、企業に子どもたちが出ていくというようなことで、すごく大きな成果とか、気づきがあるというところは改めて分かりました。

一方で、これはちょっと整理が必要かなと思うのは、船木さんから学習する地域という非常に魅力的な尼崎市の事例、市民、子どもが場合によっては語り手になって、300ぐらいの講座がわっと一斉に開かれるというのは非常に魅力的な地域の姿ではあるんですけども、子どもが学び育つ、かなり大きな要素は学校ではあるけれども、学校だけではないと。

学校の役割、守備範囲というのをある程度相対化することも大事なかと。

というのは、子どもの居場所として今時間的にも結構大きいのは学童や新BOP、この時間がかかり長いですよ。場所は学校だったり、最近では学校に入り切れない大規模校は外につくったりもしていますが、ここでの学び、育ちもあるだろう。また、児童館も25展開している。青少年交流センターは3か所あります。また、地域の学びということで言うと、図書館とか、区民センターの様々な講座とか、お祭りとか、こういったものがあります。そういう地域資源がトータルで子どもを支えていく。

そして、子どもと大人が時にはフラットな場で共に学びや気づきを分かち合う地域というものの中で、学校がどの部分をしっかり担うべきなのか。しかし、それを全て学校に求めてきたのが日本のこれまでの社会や、ある意味で教員の多忙化ということが今物すごく深刻な問題になっているので、こういったシンポジウムで盛り上がっているような例が出てくればくるほどますます忙しくなるということで、ただでさえ忙しい学校の先生がもうやっていけないというふうになるのは、これは改革ではなくて、逆に後退なので、そこは地域全体が学ぶというところの中で、学校の役割としてしっかり支える部分と、地域の中でみんなでやっていく部分と、そのあたりが今後議論できるといいなと思いました。

○宇都宮教育総合センター長 ありがとうございます。

それでは、短い時間でしたけれども、これで意見交換会は終わらせていただきたいと思えます。ありがとうございます。

○司会 区長、教育委員会の皆様、ゲストの皆様、ありがとうございます。本日は御質問が多く、本会議の中で御回答できず、大変申し訳ございませんでした。

それでは、以上をもちまして、令和6年度第2回総合教育会議を終了させていただきます。

なお、本日の総合教育会議は、一、二週間後とはなりますが、世田谷区の公式ユーチューブチャンネルで配信する予定です。ユーチューブでは過去の回も配信しておりますので、併せて御視聴いただければと思います。

改めまして、皆様、長時間にわたりありがとうございます。これにて終了します。ありがとうございます。

午後3時57分閉会